

成經、康頼、俊寛の三人が鬼界ヶ島の流人としてわびしい三年を過した、そうして毎日海邊に共に出ては迎ひの船がくるか、赦免の知らせがくるかばかりまちあぐんでゐた。處が或る日夢かこばかり思はるゝ喜びをもたらして赦免の迎ひの船が島についた、左衛門尉基康が使者となつて來た、清盛の赦免の令狀をよんでみる。成經、康頼の二人は許されるこかいてあるが俊寛の名がかゝれてない、三人がかはるゝ讀んでみたが俊寛の名が見えぬ。それに二人へはいろゝ都の子からのここづつもあるが、俊寛には何にもない。二人の喜びが深いだけに、俊寛の悲しみは深かつた。俊寛の歎き、二人の人々の慰めの言葉『平家物語』にはかうかいてある。

俊寛がかやうになるこいふも、御邊の父、故大納言殿のよくなき謀叛の故なり。さればよその事こ思ひたまふべからず。赦されなければ、都までこそ叶はずこも、せめては此船に乗せて、九國の地までつけて給へ。各々これにおはしつる程こそ春は燕、秋は田面の雁の音づるゝやうにおのづから故郷のここも傳へきゝつれ、今

より後は何こしてか聞くべきこて、悶へ焦れたまひけり。少將誠にさこそ思召し候ふらめ我等が召しかへさるゝ嬉しさも、さる事にては候へこも、御有様を見奉るに、更に行くべき空も覺え候はず。此船に打ち乗せ奉りて、上りたくは候へこも、都の御使、いかにも叶ふまじき由を頼に申す。その上赦されもなきに三人ながら島の内を出でたりなんご聞え候はゞ、仲々悪しく候ひなんす。成經先づ罷り上りて、人々にも能々申し合せ、入道相國の氣色も伺ひ、迎に人を奉らんその程は日頃おはしつるやうに、思ひなして待ち給へ。命はいかにも大切の事なれば、假令此瀬にこそ漏れさせ給ふこもつひには何か赦免なくて候ふべきこやうゝに慰め宣へこも、僧都堪へ忍ぶべくも見え給はず、さる程に船出さんこしければ、僧都船に乗りては降りつ、下りては降りつ、あらまし事をぞしたまひける。少將の形身には、夜の袈、康頼入道の形身には一部の『法華經』をぞ止めける。既に纜解きて船押し出せば僧都綱にこりつき、腰になり、脇になり、丈の立つまでは引

かれて出づ。丈も及ばずなりければ僧都船にこりつき、さて各々俊寛をば、終に捨て果てたまふか、日頃の情も今は何ならず、赦されなければ都までこも叶はずも、せめて此船に乗せて九國の地までこ、口説かれれども、都の御使いかにも叶ひ候ふまじきて、取りつき給へる手を引きのけて、船をば遂に漕ぎ出す。僧都せん方なさに渚に上り、倒れ伏し、稚きもの、乳母や母なごを慕ふやうに、足摺りをして、これ乗せて行け、具して行け、宣ひておめき呼び給へども、漕ぎ行く船の習ひにて跡は白波ばかりなり。未だ遠からぬ船なれども、涙にくれて見えざりければ、僧都高所に走り上り、沖の方をぞ招きける………。さる程に船も漕ぎ隠れ、日も暮るれども、僧都あやしの臥所へも歸らず、波に足打ち洗はせ、露に萎れて、其夜はそこに明しける。さりこも少將は情深き人なれば、能きやうに申す事もやこ、頼みをかけて其瀬に身をも投げざりし心の中こそかなしけれ」俊寛は少將の情を頼み、若しや迎ひの船やくるこ一年をまちあぐんでゐた。そこ

へ都にて召し使うてゐた童子有王が主を思ふ一念に遙々都から俊寛を尋ねてきた。有王は鬼界ヶ島について、そこはかこ尋ねまはれども、それらしい人に逢はず、こうしやうこ思ひ惑うてゐる所へ『蜻蛉なごのやうに瘦せ衰へたる者よろほひ出で来り、元は法師にてありけりこ覚えて、髪は空様に生ひ上り、萬の藻屑こりつけて荆棘を戴きたるが如し。繼目顯はれて皮肉たゞれ、身に着たるものは、絹布のつぎも見えず、片手には荒海布を持ち片手には魚を貫ひて、持ちあゆむやうにしけれども、はかもゆかず、よろここして出で来りぬ』之が尋ぬる俊寛僧都であつた。

三

有王は氣がつかなかつたが、俊寛は夫こ氣がつくこうれしさに身も世もうちわすれて有王の膝に泣き伏した。有王漸く助けおこして、氣をこりなほさせ都の事なご語らうた。そうして松の葉を敷き松の葉の屋根をした竹の柱でたてた庵につれゆか

れた。都にては、北の方も、残しておいた男子も死し、残るは十二歳になる姫ばかりいひ、姫からの文を渡した。この俊寛の述懐を『平家物語』にはかうかいてある。

『此島へ流されて後は、曆もなければ、月日の經つをも知らず、只自ら花の散り葉の落つるを見ては、三年の春秋を辨へ、蟬の聲、春秋を送れば夏も思ひ、雪の積れば冬も知る。白月黒月の變りゆくをみては三十日を辨へ指を折りて數ふれば、今年も六つとなるも覺ゆる。稚きものも早先達ちける。ござんなれ、西八條へ出でし時、此子が行かんも慕ひしを、聽て歸らんするぞも慰めおきしが、只今のやうに覺ゆるぞや。それを限りだにも思はましかば。今暫くもなきか見ざらん。

親子なり、子もなる、夫婦の縁を結ぶも皆此世一つに限らぬ契ぞかし。今は姫が事ばかりこそ、心くるしけれも、それは生身なれば、歎きながらも過さんすらん。さのみながらへて、おのれに憂き身を見せんも、我身ながらつれなかるべし。さて、食事を止め、偏に彌陀の名號を唱へ、臨終正念をぞ祈られける。有王亘り

て二十三日に申すに、僧都庵の中にて遂にをはり給ひぬ。年三十七もぞ聞えし。』

此の『平家物語』の記事によれば、俊寛は妻子の先だつていつたのこ、永らく世にあれば有王に氣の毒であるといふので、彌陀の名號を唱へ、臨終正念を祈り、食事を絶つて自盡したのである。世を果敢なみ望みを絶ちて、來世の得脱を期する念佛者となつて、自らこの世を去つたやうである。世の荒き風波にもまれ、失望、落膽、懊惱、悶亂の結果、つひに世を果敢なみ來世の淨土を願ひて、自殺するに至るのは、確かに人の心の趣く所の一つの道である。

此世を後にして自殺する心は、堪えられない苦惱に沈み、再びたちあがる力の絶えた者にきつこ萌してくる心なのである。苦惱の果てに厭世の自殺をするのは、その心の行くべき所にゆかれないで反つてあらぬ所にそれて行く舉動に過ぎない。この反動的の心が本になりて彌陀の名號を稱へて淨土往生を願ふ心も、ほんたうに人の心のゆくべき所にゆくのではなくて目のくらんだ、無自覺な心が手さぐりに選び

出すくらい洞窟ではあるまいか。こんな終りを遂げた人は澤山あつた、今日でも澤山にある。私も自分の破滅を感じ身も世も絶ゆる程の苦惱をした折には自殺を思ふた。そうして、その苦惱を紛らす爲に名號も高唱した、然し之は一時の紛らかしに過ぎない、逃避的の自己欺瞞の生活にすぎない事を體驗してきたのである。かゝる體驗のある私は『平家物語』の作者に寫つてゐる俊寛の心の終りがあまりにあぢきなく、あまりにつきこんでゐないにあきたらないのである。

『平家物語』の俊寛の最後の所を讀むうちに私は法然上人の教を受けて、かゝる汚れた世にあるよりも早く淨土に往生したしというて入水して果てたさいふ室の遊女の事が思ひ出された。平安末期の人心の一面は確かにこんなあんばいに逃避的なものになつてゐた事は明かである。それを思ふに俊寛が斷食して彌陀の名號を唱へ臨終正念の往生を遂げたさいふ事は、さもあつたらうと思はるゝのである。でも、今日の私自身の生活としてはこんな斷念的な進路をみる事は到底できないのである。

俊寛は果して平靜に臨終正念の往生を遂げたであらうか、彼は稱名しつゝ、清盛を怨む心はなかつたか、成經、康頼を怨む心はなかつたか、ミ疑はずにはゐられない。之をはかない斷念的な稱名でおさへつけて死んでいつたのではあるまいか。

こゝをねらつたのが、倉田百三氏の『俊寛』であつた。倉田氏は俊寛は決して穩やかに稱名して臨終正念の往生を遂げたと思ふ事ができなかつた。倉田氏自身夫は堪へられぬ事であつた、こゝに倉田氏の俊寛が描かるゝのである。倉田氏は俊寛は怨み、憤り、悶え、苦しみ、狂するやうにして自殺し、怨みに生きたのだと書いてゐるのである。氏はかう書いてゐる。

『わしは最後まで勇士としてたつぞ。自分を賣らぬぞ、有王船を用意しろ、船を。』

『只一矢をこゝの腕にまだ力のあるうちに。』

『只一太刀！ わしの憎みを清盛の肉に、只一太刀刻みつけるために。』

『残つてゐる、まだわしの腕に力が残つてゐる。』

『清盛よ、おまへがわしに課した苛責の償をお前に知らさずには置かぬぞ。』

『今わしが流すこの油のやうな涙をお前の歡樂の盃に注ぎこんでのまさすにはお
かぬぞ。』

『この苦しみを倍にして、七倍にしてきつこおまへに酬いるぞ！ わしの足がまだ
わしの身體を支へる限り、あゝ船を出せ船を。』

『たゞひ生きながら龍になつて大海を越ゆるこも！ わしは憎む、わしは憎む、え

ゝこの頭がはりさけるわい。』

『わしは最早飲食を斷つのだ、わしは早く死にたい。』

『わしは干ほしするのだ。わしの呪ひが悪魔の心に向ふために。わしの肉體の力は
つきた。わしに残つてゐるは只魂魄の力だ。わしはこの力で復讐してみせる。清
盛はわしからすべての力を奪つた。然しこの力は奪ふ事はできないのだ。清盛が
夫を知らないのは笑止だ。人間の魂魄の力がどれだけ強いかわしは夫を知らせて
やる。清盛を呪ふてやる、共に魔道に伴つてゆくぞ。』

『いかに月天子。汝の照らすこの世界をわしは呪ふぞよ。汝の偶たる日輪をも呪ふ

ぞよ。嘗つては汝等の名によりて此世界に正しき律法のあることを證した事もあつたが、今は悪魔の名によりて夫を取り消すぞ。あゝこの世界をわしは憎む。わしが生きてゐる間、いかにわしを遇したか。それをわしは永劫に忘れぬぞ。此の世界は歪める世界だ、善が減び、悪が勝つ世界だ。あゝ、なきに劣る世界だ。かゝる世界は悪魔の手に渡すがよい。悪魔よ來れ。わしは今こそ汝に親しく呼びかけるぞ。わしは三界に怨靈さいふものゝできる理由を今こそ明かに知つた。わしのごこく遇せられて死んだものゝ靈が怨靈にならずして何になるのだ。あゝ信賴の怨靈よ。わしに憑け。わしに憑け地獄に住む悪魔よ、陰府に住む羅刹よ、濕地に住むありまあらゆる妖魔よ。みなその陰氣なる洞窟を出で、わしの圍りに集へ、わしはわしの靈を汝等の手に渡すぞ、わしはわしに生を與へたるものに背き、永劫に汝等に屬することを誓ふぞ。わしの誓ひのしるしを受けい。……あゝ悪魔よ、わしの呪を容れよ。わしはあらゆる悪鬼の名によつて呪ふたぞ！ 清盛は火に燒

けて死ぬ、宗盛の首は梟られよ。維盛は刀に斃れよ。わしは清盛の女の胎を呪ふたぞ。その胎より出づる者は水に溺れよ。平家に禍あれ。平家の運命に火を積むぞ。平家の氏に呪を置くぞ。嵐の嵐まで裔の裔まで呪ふたぞ。清盛よ汝を地獄に伴ひゆくぞ。……汝潛行者よ。天の座より落ちおれい。悪魔よ羅刹よ妖魔よ。來りて我圍りに集へ、すべて汝等の族に屬する者悉く來りて我呪ひに名を寄せよ。わしは今わしの魂魄を永劫に汝等の手に渡すぞ。おゝ清盛よ奈落の底でまつてをるぞ。』

かく叫んで、俊寛は巖頭に頭をぶつつけて死んでしまふた。

倉田氏の書かうしてゐるのは俊寛の人間らしい心の姿である。一念の妄執に三千大千世界を動かす力を語らうしてゐるのではないか。業力の不可思議なる事を嘆賞しやうしてゐるのではないか。わしの肉體は死んでも、わしの憎みの魂魄は永遠に清盛を呪うてやるさいふ、この俊寛の叫び、その斷念できない執着の念力に

俊寛が永劫の生命の流に溯つてゆく事を書かうとしたのではないか。

怨みあればどこまでも怨みぬけ、憎みあればどこまで憎みぬけ、よい加減な所に止まるな。わしらの進む道は八方に十方に開けてゐるのだ。そこに善もない、悪もない、たゞ自分の中心にまうにもならぬものゝ湧き出る、その偉大なる力に随順するより外はない。

清盛からこんな苦められ、憎まれて、孤島に一人闇い生涯を果さねばならぬ俊寛として、安らかに念佛して往生を期する事は表面的な考へであつて、決して衷心からそんなになれるものではあるまい。だから、俊寛の中心にくひこんでゐる清盛に對する憎悪の呪ひこのまゝに勇猛に精進する所に、俊寛の生命が躍動するのだ。

私達は、内心に憎悪と怨呪の心を抱きつゝ、安らかなやうなふりして逃避して、淨土往生を祈つて死んでゆくのは、自己欺瞞の甚だしいものである。怨みあればどこまでも怨みに生きねばならぬ。呪ひあればどこまでも呪ひに生きねばならぬ。和す

るばかりが道ぢやない、戦ふのも道なのだ。戦ふならどこまでも突進して戦はねばならぬ。

俊寛が月を呪ひ日を呪ひ、世を呪ひ、一切の善を呪ふた心持ちは私には能く味はるゝのである。私は總てから捨てられた感じ、自己の起ちあがる瀬のない程に行きつまつたのを感じた時に、恐懼と憤怒に心はもえたちて、之まで有難がつてゐた神も佛もすべてふりすてしまふやうになつた。しかしわしは憎みに生きなかつた。怨みに生きなかつた、呪ひに生きなかつた、そうして自殺しなかつた。英文の『法句經』にかいてあつたヘートレット、シーズ、ナット、バイ、ヘートレットの語を思はずにはゐられない。

わしは憎むよりもつゝ大切な道のわしにある事を感じた。呪ひよりもつゝ本質的な自分の道のある事を感じた。私は人を呪うて自殺せられなかつた。

呪ひ、憎み、之は人として時に脱する事のできぬ、特に悲境にたつたものにミリ

て脱するこゝのできない心の火焰であるにはちがひない。だが、之はまだ本質的なものではないのだ。呪ひも憎みも共に對立的の感情である。相手をもつた感じである。私達はこの對立の境地から一步を出ねばならぬ。かくて私の體驗の世界では、呪ひも憎みもに燃焼していつた俊寛の進みに全然共鳴するこゝができないのであつた。

四

菊池氏は大分ちがつた考から俊寛の最後を見てゐる。成經、康頼が都にのほつた後に、俊寛は氣落ちのしたやうに、海岸に倒れてゐた。そうしてその夜は、小屋に歸らなかつた。夜が明けた時食物の不足から烈しい饑渴に逼つた。この渴き餓きにせめたてられたる俊寛は死を思ふた。そうしてさうして成經や康頼のたつて行く折に潔よく死な、んだらうとも思ふた。

『二十間ばかり向ふの岸に、一つの岩がありその下の水が殊更に深いやうに見えた。』

『彼が決心して立ちあがつた時、ふみ水の匂ひを臭いだ、それは眞水の匂ひであつた。極度に渴してゐる彼の鼻は犬のやうに鋭くなつてゐるのだつた。彼は水の匂ひを臭ぐに本能的にその方へ走り出した。唐竹の林の中を彼は獸のやうにくゞつた、十間ばかりくゞつた時、その林がつきてそこから岩山が聳えてゐた。ふみをこゝにこの大きい岩を背後にしてこの島には珍らしい椰子の木が十本ばかり生えてゐるのをみた、そうしてその椰子に蔽はれた蒼色の岩から、一條の水が銀の糸のやうにしたゞつて、それが椰子の根元でさへ泉になつてゐるのをみた。水は浅いながらに澄みきつて、沈んでゐる木の葉さへ、一々に數へられた。渴しきつてゐる俊寛が犬のやうにつくばつて、その冷たい水を思ひきりがぶくゝのんだ。それが何といふ心よきであつたらう。それは彼が鹿ヶ谷の山莊で飲んだいかなる美酒

にもまさつてゐた。彼がその清冽な水を味つてゐる間は清盛に對する怨みも、島に只一人残された悲みも忘れはてたやうにせいくした氣持ちだつた。彼は蘇みがへつたやうな氣持ちになつて立ちあがつた。そして椰子の木末を見あげた。する木末に大きい實が二つばかりなつてゐるのをみた。俊寛は疲勞を忘れて猿のやうによぢのほつた。それをたゞき落すに傍の岩でうち碎き思ふさま貪り食ふた。彼は生れて以來、之程の難有ささこ之程のうまささを飲食した事はなかつた。彼は椰子の實の汁をすうてゐるに自分の今までの生活が夢のやうに淡くうすれてゆくのが感じた。清盛、平家の一門、丹波少將、平判官、丹左衛門尉そんな名前や、そんな名前に對する自分の感情が、この口の中のすべてを、否心の中の總てを溶かしてしまふやうな木の實の味に比べて全く空虚なつまらないもの、やうな氣がしはじめた。俊寛は口の中に残る心よい感覺を樂みながら、泉のほごりの青葉の上になた。そして過去の自分の生活のいろ／＼の相を心の中に思ひ出してみた。都

に於けるいろ／＼な暗闘、陌擠、戰爭、權勢の爭奪、それからくる嫉妬、反感、憎惡、そついふ感情の動くまゝに狂奔してゐた。自分のあさましさがしみる／＼わかつたやうな氣がした。船を追うて狂奔したきのふの自分までが、餓鬼のやうにあさましい氣がした。煩惱を起す種のないこの絶海の孤島こそ自分にこりて唯一の淨土ではあるまいか。康頼や成經が側にゐた爲に、都の生活に對する否人生に對する執着がきれなかつたのだ。この島を假りの住家と思へばこそ、硫黄ヶ嶽にたつ煙さへ、焦熱地獄に續くものゝやうに、ものうく思はれたのだ。此處こそつひの住家だ。あらゆる煩惱を執着を絶つて、眞如の生活に入る道場だ。そう思ひかへすに俊寛は生れかへつたやうな朗らかな氣持がした。ふさねがへりをうつさず自分の鼻の先きに撫子に似たま赤な花が咲いてゐた。それは都人の彼には名も知れない花だつた。が、その花の眞紅の花瓣が何こいふうつくしささ清らかさをもつてゐた事だらう。この花をじつと見つめてゐるに

人間の總てから知られないで、うつくしく香つてゐるかうした名も知れない花の生活もいつたやうなものが考へられた。するゝ孤島の流人である自分の生活でさへ、むけに生き甲斐のないものだこは思はれなくなつた。彼は自殺しやうとした自分の心の淺はかさを耻ぢた。彼の心にはいま新しい力が湧いた。彼は誦經してたちあがつた。そして海岸にたち出た。平素は魂もくらむやうにもうく思はれた大洋が、何さうつくしくかゞやいてゐた事だらう。充分のほりきつた朝の太陽の上に紺碧の潮が後から後から湧くやうに踊つてゐた。海に接してゐる砂濱は金色にかゞやき、さびかうてゐる信天翁の翼から銀の光を發するかさ疑はれ、平素は見るこゝを厭うてゐた硫黄ヶ嶽にたつ煙さへけさは澄みわたつた朝空に琥珀色に優にやさしくたなびいてゐる。俊寛は童のやうなびやかな心になりながら両手をさしひろげ、童のやうに叫びながら自分の小屋へ驅けもぎつた。』

菊池氏のこの記事を見るに、俊寛が人々との對立の世界から、動物のやうな獨

自の世界に進んでゆく跡がよくかゝれてゐる。倉田氏の俊寛をよんで熱湯を呑むやうな氣がするのが、菊池氏のをよむに清水をのむやうな氣がする。白熱の炎天の下から清冽な水の湧く泉のほりにきたやうな氣がする。

絶望の末に自殺を思ふた彼は、初めに水にさそはれ、次に椰子にさそはれて、たうさう蘇生して、之までの生活がいかに對立的であつて、憎惡やら、闘争やら、嫉妬やら、戦争やらのこせくした境地にゐた事を耻づるやうになつた。かくなるのは彼には偉大な進展であつた。權勢を争ふ一人の革命家がやがて一個の人間としての生涯に入るやうになつたのである。政治的革命家であつた俊寛は平凡な人間になつた。

彼は對立的な生活から去つて、獨自の世界に進んだ。彼の心の中にかやうな進展があつてから彼は魚もこるやうになつた。鳥も捕へるやうになつた。つひには鳥の娘との戀が生る、やうになり、この娘と結婚するやうになり、田を耕すやうになり、

五人の子をもつやうになつた。かくて俊寛は一個の平凡な百姓として靜かな、而も、ほんたうの力のこもつた生活をするやうになつてゆく跡を菊池氏はその輕妙な筆でよくかき出してゐる。

清水ミ果物ミに渴ミ餓ミを凌ぎ得る天地に蘇生して、人に對する權勢や争闘の心を離れた者にはいかにも、寛いだ、豊かな世界が開けてくるのである。

俊寛には清盛が敵でなくなつた。さうなんだ。最早俊寛は清盛ミ同列の世界に住まなくなつたのである。京都にのみ彼の世界があると思へばこそ清盛の專横を憎みもしなければなるまいが、この孤島に自分の世界を發見した俊寛には最早憎むべき清盛もなく、呪ふべき清盛もない筈である。

有王が尋ねていつた頃は、俊寛はもう島の人ミしてすみきつた心をもつて毎日働いてゐた。だから彼には都に上つて俊寛は死んだミ告げさせて、自分は靜かに天壽を全ふしたミいふのである。

私は菊池氏の人生の見方が大分面白いと思ふ。

私はこゝに來て、生きるミいふここの意義を考へたいと思ふ。倉田氏のかいた俊寛が生きていつたのか。菊池氏のかいた俊寛が生きていつたのか。ミこまでも憎みぬき、呪ひぬいて死んでいつた俊寛はほんたうに自分に生きていつたのか。菊池氏のかいた俊寛の方がほんたうに生きていつたのか。私達はほんたうに深く考へねばならぬ。

執着に生きるのも生きるのであらう。本能に生きるのも生きるのであらう。さちらが、人間にミつて本質的な生きやうなのであらうか。

俊寛が清盛の權勢を奪ひ取らうミして彼から憎まれて、孤島の流人ミなつた。孤島の流人ミなり、彼の友人が赦されたのに彼一人残された。彼は憤懣にたへなかつた。心が京都の方面にのみ注がれてゐた彼の爲に、上洛の赦されないのは、死を強ふる事である。こんな孤島に動物のやうに住んでゐる事は堪へがたい事である。かやうに朽ち果つるやうにするのは清盛の仕業である。自分の命の敵は清盛である。

彼は自分に死を迫るのだ、自分に死を迫る清盛をさうしてこのまゝにしておかう。彼にも死を與へねばならぬといふのが倉田氏の俊寛の呪ひであつた。この呪ひの心も誠に切實なものである。

俊寛が上洛を念願してゐた心は本能そのまゝである。それを叶はさないといふので清盛を憎む心も本能のまゝである。しかし彼はこの憎みを土臺として、呪ひの心に全身を投げるやうになつた。此時彼は本來の自分の行く所に行かないでそれについてたのではないか。

自分の行きたい所に彼がやらないから、彼もそこにつれていつてやるといふ呪ひは、やはり幽霊思想の一種であつて、行く所にゆかれぬ怨みにもゆる心である。俊寛は清盛を呪ふより、さうまでも自分の始めの一念を通すやうにせねばならぬ。清盛が呪はしいのは第二義的な派生的な心であつて、やはり彼の本質的な第一義的な願ひは彼自身の生活の自由を得る事にあつたのではないか。果してさうだつたら彼

はさうまでも自分の生活の自在を求めてゆくべきであつた。それを捨て、すてばちになつて清盛もそこにつれゆかんとしたのは、自分の生きる道を進んだのではなくて絶望のむちやくちやにすぎない。人があまりの逆境にたつここんな絶望的な事をやるのは、あながち無理さと思はぬが、それは騎虎の勢でやつてゆくといはるゝが、その進みには、無理があつて、自分をすてた、死滅の道に陥つてゐるのである。

同じ執着でも、ダンテがビヤトリチエを思ひ込だ執着や、清盛が安珍を追ふ執着には何等の反動的なものがない、無理がない、だから力づよい、本質的のものである。倉田氏のかいた俊寛の場合はそれとはやゝ趣きを異にしてゐる。倉田氏の俊寛はさうしても赤裸々な本質的人ではなかつた。

之に對して菊池氏の俊寛は、菊池氏が真如の生活に入つたといつてをるやうに、俊寛が靜かな心に眞實の自分の生きてゆく道に進展していつてをるやうに思はるゝ。愛も人情なれば、憎も人情ではないか。そうすれば愛に執するも、憎に執するこ

一つではないかといふ人があるかもしれぬ。然し私はそうは思はぬ。憎は愛のそれたものにすぎないと思ふ。人には本来愛する心、愛せられたい心があるのに、それが充足せられない時に起る心が憎であると思ふ。だから憎は愛から生れる派生的な感情であつて、愛を願うてゐる人が憎に進んでゆくのは、自己破滅をする事になるのである。愛に執するのは、生くる道のそのまゝではあるが、憎に執するのは、反動的にそれてゆく死滅の道である。憎の執から生るゝ呪ひが人間の本質的な正道でない事はいふまでもない。只その自分の所信をどこまでもまけないで、突進するすがたに尊い所もないではないが、でもそのどこ自身が進展してゐないで退却してゐる事を思はねばならぬ。この點で私は復讐心なきも賞すべき心ではないと思つてをる。

菊池氏の俊寛は、自分の之までの生活は對立的な、第二義的なものであると思つて動物のやうに個性的に生くるやうになつたことを現はしてゐる。かつて大苦惱

に沈んで更生した私はこの菊池氏の俊寛の蘇生に同感するのである。

倉田氏の俊寛は政治的革命家で終始した。菊池氏の俊寛は、政治的革命家が一轉して個人的生活者になつた。獅子のやうな、野生の第一人者になつたのである。だから彼の俊寛には、鬼界ヶ島が決していやな所ではなくなつて、住めば都といふやうに、自分の住み心地のよい土地になつたのである。もうかうなつては清盛が太政大臣にならうが、頼朝が總追捕使にならうが、そんなどこには一向に頓着のないやうな心の広い人になつたのである。「帝力何ぞ吾に及ばんや」を鼓腹する、圖抜けた男になつたのである。呪ひつゝ、死んだ俊寛はまだ清盛に害せらるゝ人であつたが、平凡な生活に蘇生した俊寛は最早清盛の敵となるやうな小さい男ではなかつた。太政大臣清盛は最早彼の目の上の者ではなかつた。故に最早や彼には憤慨もなくなつた。大した憎悪もなくなつた。況んや呪ひをやである。彼は靜寂な自分自身の生活をする獨立者であつた。

その傾向からいふと、倉田氏の俊寛はマルクスのやうに、共産主義を叫ぶ社会主義者のやうな政治的革命者である。菊池氏の俊寛はクロボトキンのやうに、無政府主義者である。平凡なる俊寛、動物のやうな俊寛には政府や大臣は邪魔にもならず、得にもならず、殆ど眼中になくなつてゐる。だから政府を破壊するの要もなければ政府をこしらへる要もなくなつてゐる。彼こそは眞の勇者であるのだ。

菊池氏の俊寛を思ふ時に、私はかつては奈良の學僧であつた人が女と共に、播州加古川の河畔に河守をして一生を過したといふかの教信沙彌の事が思ひ出される。トルストイのかいた神父セルギイが修道院から出てシベリヤの野をさまよひあるく姿が思ひ出される。親鸞の姿が思ひ出される。菊池氏の俊寛は、確かに同じ時代に於て代表せらるゝ親鸞魂を俊寛の上にかいたのではあるまいか。『平家物語』の俊寛は法然式の男であつた。倉田氏の俊寛は清盛式な男であつた。菊池氏の俊寛は親鸞式の男であつた。

私は、いつまでも對立の世界にいらゝした生活を送つて、階級闘争を事としてゐる人達の群から離れて、獨り都に悠々として自分の道を進みゆく人を尊いと思ふ。そうしてその人の姿を菊池氏が蘇生した俊寛の上に見せてくれたのをよろこぶのである。(10、10、11)

五。北安田より

涙骨さん、二三日は大變によい日和が続きます。久しかつた低氣壓はもう去つたらしい。天氣がよいミ、氣が清々ミします。胸に一ぱいの惱みを持つ私でも天氣のよい日にはその惱みからすつこちあがります。同じ線香の煙りでも、風のない日は眞つすぐに立上るのミ同じやうな譯であります。

こちらでは松茸がないのですが、榛の木のコケが澤山出来るので、毎日食べて居ります。梨、無花果、なつめ、栗なミがあります。花は種々咲いて居ります。ダリヤ、百日草、濱菊、みせばや、石竹、木槿なミが咲いて居ります。雌來紅も紅の色を見せて居ります。種々の菊も咲きかけて居ります。そんな澤山の花のある中に矢張り私はばらが一番好きです。白、黄、桃色、赤、いろ／＼のばらが絶えず咲いて

居ります。殊に眞紅の大輪の花の香は酔はすやうです。毎日のやうに切つてきて室内に賞翫して居ります。

先月の二十五日から、若い人達ミ一緒に輪讀しかけた『華嚴經』はもう終りかけて居ります。多分明晩で完了します。ポツリ／＼ミ讀んで行く時の味ミかう一瀉千里で讀んでゆくミは大分違つた味があります。讀むミいふよりも眼の悪い私はぢつミきいてゆくのミです。それで此處二十日あまりはぢつミ聽聞者になつてゐたやうです。

『佛』、『如來』、『法』、『一切』、『衆生』、『慈悲』、『光明』、『智慧』ミいふ字が無暗に出て來る經典であるミはいふまでもないが『海』、『雲』の二文字が殊に多くめだちます。あの暑い熱帯の人々が『海』ミ『雲』ミにあこがる、心持がよく現はれて居ります。『海』は廣大にして遍際なき心を現はし、『雲』は無常のはけしき生々の姿を現はして居ります。殊更私が今度氣づいたのは、『轉』ミいふ字の多いミであります。『轉』は變化を意味し進展を意味するのです。『法王菩薩問阿僧祇品』の終りに不可思

議の不可思議は不可稱量なり、不可稱量の不可稱量は不可説なり、不可説の不可説は不可説轉なり、不可説轉の不可説轉は不可説轉の轉なりとある。あの轉の一字に華嚴全體が表現せられて居るやうであります。『雲』のいひ『轉』のいふのは同じ心持の現はれであります。華嚴經を讀んで、ベルグソンの哲學を思はしむることが折々あります。

入法界品の中に善財童子がいろいろの國の色々な善知識を尋ねまはることを書いてあるのはいふまでもないことである。そのうち『進求國』の『方便命婆羅門』を尋ねた處なごは感銘が深い。『進求』のいふ國の所も面白い。その國の婆羅門に『方便命』のいふ人のあるのも面白い。『進求』する者には『方便』が自然に生るゝ事がよく現はれて居る。この『方便命婆羅門』が刀山に登り火聚に入らずば菩提を得ることを期すこというて居ることも面白い。常に『進求』する者は刀山に登り火聚に入ることを期せねばならぬ。苦しむことのいやなものは進むことが出来ないのである。『進求』の

『方便』の『刀山』に登ることの三つは離すことの出来ない、我等の菩提の道であります。

吾を抱擁するものは攝一切衆生三昧を得、吾にキスする者は諸功德密藏三昧を得るということ居る。婆須密多のいふ、女の善知識の居る國が險難國のいふのも面白い。誠にこんな女の居る國は險難です。それでも菩提を求むる者は一度はこの國を通らねばならんではありませんまいか。大部の『華嚴經』の讀後感はなか／＼こんなことでは盡くされません。今日は一寸その一端をお漏らしした次第です。

『無量壽經』の講話を書かうと思つて家に籠つてゐた私は『華嚴經』に耽りこんでまだ何も書いて居りません。それに一度はすっかり斷つてゐたのですが、鹿兒島の病んで居る人が來年を期し難いこというて是非來いこというてきたので、十九日に出掛けます。時間がないので今度は歸りにも行くにも京都へは下車しません。多分三十日に京都を通過して東京方面に向つてすぐ歸國する豫定です。あなたのカラ／＼

笑ふ顔を今度は見ないで京を素通りします。お許し下さい。さうぞお大事になさつて下さい。(二〇、一〇、一六)

六。恐るべき人物評

原敬氏が十九歳になる青年に刺された事について、私は深く私自身の言葉こいふ事について考へさせられました。あの青年は誰か、原氏は國賊であるか、原氏が日本にあることは、日本の害毒であるかこいふのをきいて、夫をうのみに信じて、原さんを刺すやうになつたのである。私はこの事について二つの事を考へました。人は苟くも他人のいふ事をうのみに信じて事をなしてはならぬこいふ事、二には人を評するには苟も之を許してはならぬこいふことであります。

某青年が原氏を殺してから私は私自身を反省してみた。私はこれまで原氏を悪ざまにいふた事はないが、原氏が日本の政治をやつてゐる事は喜ぶべき事ではないこいふた事はある。こんな言葉だつて、この言葉通りに考へてみるこ、愛國者は原氏

を殺すのが當然だといふ處までゆかねばならぬやうになるのだ。新聞紙なきて随分酷い評をしてゐるのがある。あんな批評をまだ年齒もゆかぬ者がきいて、一圖に思ひこんだなら、原氏を殺す事が大變よい事をするやうに思ふやうになつたのも偶然ではないと思ふ。かう思ふに原氏を殺したのは某といふ青年でなく、某といふ助役でもなくて、反對黨の政治家連、いやもつゝ自分に考へるに、かういつてゐる私自身に殺したやうな氣もするのである。

私達が、原氏の悪い方面を指摘して、酷ういつてゐても、その半面の善い方面もよくわかつてゐるから、手を下して殺すといふこともなく、又人が殺してくれたらよいと思はぬのであるが、何にもしらぬ青年が單に原氏の悪い方面のみを聞いて文字通りに、そんな人かききこみ、率直に信じてしまふに暗殺する氣になるのも無理ではないやうに思ふ。だから原氏の暗殺の責任者は下手人たる十九歳の青年よりも原氏の事をいろ／＼悪ざまにいふた人にあるといつてもよいのである。私は恐

ろしい事だと思ひました。

人が人を批評する、夫をそのまゝ盲信する事は危険な事である。かく／＼の悪い事をした人だといふのをきいて、そんな人、その人の全體をきめやうとするのはよくない、その人を評する者のいふ通りに、そんな悪い所があるにしても、それがその人の全體ではなくて、外によい點があることを思はねばならぬ。石川五右衛門が盜賊だからといつて、誰のものでも盜んでばかりをるといふわけではなく、彼でも人を憐んで施しをするやうな事もあるのである。徳川家康はすうい男だといふたかといつて、徳川家康にはさうではない點のあつたことも思はねばならぬ。之と同じやうに、ソクラテスは偉大な人だといふたにて、彼にだつて弱小な點のあつた事を思はねばならぬ。フランシスは清らかな人だといふたにて、彼にだつてさうでない點のあつたことを思はぬのは至らぬ心である。

人の言葉といふものは、實に不完全なものである。ある人がある場合にした事、

いふたこゝを、そのまゝいふたり、記したりしたこゝするも、それはその人の全體でないこゝを常に忘れてはならぬのである。言葉や文章の上ではいかにもその人の全體のやうにいふたり、記したりしてあつても、決してさうでない事を忘れてはならぬのである。だからある人のある悪い點を見聞して、この人は悪人だこゝきめるのも早計であるし、ある人のある善い點を見聞してその人を善人だこゝきめる事も早計なこゝである。その人がある時にある人を打つやうな心をもつてゐるこゝいふのはよいが、残酷な人であるこゝきめるのはまちがひである。又ある人がある時に人に施しをしたからこゝいうてこの人の全體を布施の心にみちた慈善家だこゝきめるのもまちがひである。處が私達には、人の一面を見聞して、その人の全體に概念的價値を定めやうとするよくない癖のある事を思はねばならぬこゝ思ひます。

そんな評言でも、皆その人がその人の一面を見た話にすぎないから、善い點を見聞して善人だこゝ信じたり、悪い點を見聞して悪人だこゝ信じたりしないやうに用心し

なければならぬ。人のいふ事をみだりに信じてはならぬのであります。同時にむやみに一時的の感情に動かされて、ある人の一時のある事を舉げて、その人の全體を估價するやうな事のないやうに心がけねばならぬ。

他人が自分の事を評するのをきく場合にも心せねばならぬ。ある人が自分の缺點をかくくゝに告げてゐるこゝきくこゝ、私達はすぐその人を敵のやうに思はうこゝするのであるが、それはまちがつた事である。ある人がある時に、自分のある時のある行爲を見聞して、夫を難じたからこゝいつて、その人があながちに、その人の全心が自分を悪く思つてゐるのでないかもしれぬのである。ある人が自分を誹つてゐるこゝしても、その他の一面に非常な尊意を拂つてゐるのかもしれないのである。私達は自分を誹る人の言をきいて早計にその人の全心が私から隔つてゐるこゝきめてはならぬ。反つて他の一面に私を信頼する心の強くわいてゐるかもしれないのである。之こゝ同じやうに、ある人が自分を賞讃したからこゝいうて、この人の全心が自分を賞讃して

るるきめてはならぬ。賞讃しつゝ、他の面の非難すべきものを見てゐるかもしれないのであります。

かやうに考へてくるこゝ、人が他の人を誹る言葉も讃むる言葉も、決して信じられない。又人が自分を誹り又は讃むる言葉も減多に受け容れられない。かくて自分も他人を全體として、善いこか悪いこか評價する事はできない事である事がわかります。かうなるこ黙々として私達は人をみつめ、自分をみつめて行くより外はないのであります。黙不二の境地がこゝからも窺はるゝやうであります。

私達は決して断定的に人を批評してはならぬ。又人の自分への批評をも断定的に聞いてはならぬのであります。口から出まかせに人を批評する饒舌を恐れなければならぬ。饒舌家の言によりて自分の心を亂されぬ様にせねばならぬ。

一面を見て全體をきめる事を避けねばならぬ、人についても、事柄についても、全體をよく見さだめる事を怠つてはならぬと思ひます。全體を考へて行く事にする

こゝこまでも、この人は善人であるこきめられる事もなければ、悪人であるこきめられる人もないのであります。又自分をも善人であるこも悪人であるこもきめられぬのであります。だからそれをきめる所の他人の評言なきに重きをおくの用はないのであります。私達は容易に他人の上を云々してはならぬ。いや云々する事ができぬのであります。人を評價するのに、それが古人であるにしても、今人であるにしても、容易に断定してはならぬのであります。かやうに考へてくるこ、人物月旦や、人物の評言なきは、するのにも、またそれを見聞するのにも、落ちついた用心がなければならぬのであります。(一〇、一一、一七)

七。佛說無量壽經の體驗者親鸞聖人

親鸞聖人が御歳五十二歳の折、常陸國稻田の草庵にてお書きになつた書籍に、「教行證文類」といふのがあります。この書は聖人が自らの信念を、一切藏經の上に讀み明らめ、一切藏經の文句を藉りて自分の信念を系統的に書き現はされた書籍であります。後八十三歳の時に、この書を略して「淨土文類聚鈔」といふのを製作せられて、この内容が、略ほ類似してゐるより見るに「教行證文類」はいかにも、聖人の自ら許してゐられた書籍と見て差支はないのである。古來親鸞聖人を敬慕する者は、この「教行證文類」を尊崇する者から、或ひは之を本書と稱し、或ひは本典ともいふてき

ました。本書といひ本典といふのは、淨土眞宗の根本の書、または根本の典といふ意味なのであります。昔から親鸞聖人の根本精神を窺ふには、是非この書を繙かねばならぬこと、してゐるのであります。

私なごは親鸞聖人の語録でもいふべき「歎異鈔」によりて、聖人の精神に觸れさせていたゞいたものであります。然し「歎異鈔」に書いてある聖人の言葉の意味を味ふには、是非この「教行證文類」を深くさぐり入らねばならぬのであります。眞宗の本典といはるゝ「教行證文類」を極めずして、眞宗を云々するはあまりに大膽であるといはねばならぬ。

ではこの「教行證文類」はどんな書籍であるかといふに、卷を六つに分けてあつて、第一卷に教を、第二卷に行を、第三卷に信を、第四卷に證を、第五卷に眞佛土を、第六卷に化身土を明してあります。この「教行信證」とは、親鸞聖人が自分の信念を表白せらるゝ一つの系統なのであります。この系統によりて自分の信念を表現する

に、聖人は多くこの言葉を一切藏經の文句の上につて、本書を名づくるに文類ミ
いうてゐらるゝのであります。

かやうに一切經の文句を羅列してあるが、本書の根本精神の流れ出るところは「佛
說無量壽經」なのであります。

或る意味からいへば、この「教行證文類」は「佛說無量壽經」の講義書であるとい
てよいのであります。教ミいひ、行ミいひ、信ミいひ、證ミいひ、眞佛土ミいひ、
化身土ミいひ、全ての卷の頭には、初めに「佛說無量壽經」の中に説かれてある、阿
彌陀佛の本願より流れ出るのであるといつてゐらるゝのであります。私は「教行證
文類」に「佛說無量壽經」を深く研究してみるに、ますます明かにこの「教行證文
類」は「佛說無量壽經」の講義書であることがわかるのであります。

「教行證文類」のはじめに序文がある。この序文がまるきり「無說無量壽經」の讃辭
である。それから第一の教卷には、

顯淨土眞實教文類一

愚禿釋親鸞集

眞實教

大無量壽經

淨土眞宗

謹按淨土眞宗、有二種廻向、一者往相、二者還相、此往相廻向有眞實教行信
證。

夫顯眞實教者則「大無量壽經」是也。

ミ書き出してあるのを見るに、親鸞聖人の宗の淵源ミ教の理致が「佛說無量壽經」に
あることが明かにせらるゝのであります。

「親鸞さらに珍らしき法をも弘めず、如來の教法をわれも信じ、人にも教へきか
しむるばかりなり」。(蓮如上人作「御文」所説)

ミ蓮如上人がいうてゐられます。この如來の教法ミはこの「佛說無量壽經」のミ

であります。

親鸞が教まいるのは、人に教へられる教にあらずして、自ら習ふところの教なのであります。自分は「佛説無量壽經」の教へによりて心眼を開くことができました。いふやうな意味で「佛説無量壽經」を眞宗の教とも、浄土眞宗ともいうてゐらるゝのであります。

今日では浄土眞宗とか、眞宗とかいふ宗門とか教團を思ひ出すのであります。甚だしうなる本願寺や専修寺を思ひ出すやうになつてをるのであるが、之は大きな誤りであります。

浄土眞宗とは何ぞやと親鸞聖人にお尋ねするに、聖人は即刻明白なる言葉を以て「佛説無量壽經」是也と答へらるゝのであります。聖人は浄土眞宗の開山ではなくて浄土眞宗の開山は親鸞、いや釋尊の開山である阿彌陀佛なのであります。親鸞聖人は自分は眞宗の一信者として考へてゐられたのであります。だからして聖人は「教

行證文類」の總序文の終りにいたりて。

爰愚禿釋親鸞、慶哉西蕃月支寶典、東夏日域師釋難逢、今得遇、難聞已得聞、

敬信眞宗教行證、特知如來恩德深。斯以慶所聞、嘆所獲矣。

さいうてゐらるゝのであります。この眞宗の教行證を敬信してさいうてゐられま
す。聖人の心持ちには、自分を以て眞宗の一信者と思つてゐらるゝ、こゝが明かに讀
み得らるゝのであります。その眞宗とは何ぞやといふのを、すぐ次に教卷を書いて
大無量壽經を標示し、これに割註を施して眞宗の教といひ、浄土眞宗といつてゐ
らるゝのであります。つまり親鸞聖人は、自分は「佛説無量壽經」を敬信する者であ
るを告白してゐらるゝのであります。

夫れでは「佛説無量壽經」にはどんな事が説いてあるかといふに、聖人は教卷に於
て

「説如來本願、爲經宗致、卽以佛名號爲經體」

ミいうてゐらるゝ、淨土眞宗は「佛説無量壽經」であり、この「佛説無量壽經」の宗致は、如來の本願である。如來の本願が即ち佛の名號を體ミするのであるミいふ意味であります。之から見るミ、淨土眞宗の宗致は如來の本願であるミいふのであります。

覺如上人が親鸞聖人の傳を書いて、「御傳鈔」ミ名けてゐらるゝその「御傳鈔」の中に聖人が法然聖人の吉水の禪室をお尋ねになつた所を記して、

大師聖人（法然）宗の淵源を盡し、教の理致を極めて之を述べたまふに、聖人（親鸞）たちミころに、他力攝生の旨趣を受得し、あくまで凡夫直入の眞心を決定ましましけり。

ミ記してゐられます。この宗の淵源は即ち「佛説無量壽經」の宗致であり、如來の本願であつたのであります。その如來の本願を自己の上に體驗したのが親鸞聖人であつたのであります。日蓮が「法華經」の體驗者であつたやうに、親鸞聖人は「佛説無

量壽經」の色讀者であり、體驗者であつたのであります。

一一

親鸞の精神に觸れやうミする者、淨土眞宗の宗致を知らうミする者は、心をひそめて、この「佛説無量壽經」を研究せねばなりません。「歎異鈔」に「彌陀の誓願不思議に助けられまゐらせて、往生をば遂ぐるなりミ信じ」ミあるのも「善人なほ以て往生す、いかに況んや、惡人をや」ミあるのも、「佛説無量壽經」に心を沈潜せしめなくては深い意趣がわからぬのであります。

私は久しい間、「歎異鈔」に育てられ救はれて來たのであります。これが自分の生活の破綻によりて疊つてきました。その後この「佛説無量壽經」を本氣に味ふやうになつて、自分の魂が奮ひたち、力ついて來たのであります。かうして「歎異鈔」の味ひも之まで味ふてゐるのミはちがうて、深い心で以て味ふ事ができるやうにな

つたのであります。であるから殊更に私は「佛説無量壽經」の研究を世の同朋におす
ゝめたいのであります。

「佛説無量壽經」「佛説觀無量壽經」「佛説阿彌陀經」の三部を、三部經と稱へて、
法然聖人の敬慕者や、親鸞聖人の敬慕者の間には、尊信せられてきたのであります。
眞宗の寺院に生れた私なごは、十二三歳の頃から讀誦を習ひ、十八歳の時には講義
をも聞きました。この後人に對して講じたこともありませんが、只經典の文句のみ
を知つてゐるだけであつて、自分の教、自分の魂の光明として味ふ事が出来なかつ
たのであります。然るに今から四年以前の秋に、妻がチブスをやりまして、私が毎
夜看護の任にあたるやうになりました。先きに一人妻を先きだてた事があるので、
又こんな事があつたらなご心がいやに亂れたので、心靜かに病人の枕頭で「佛説
無量壽經」を繙いてゐるにこれまでには味はなかつた意味をこの經の上に味ふやうに
なつた。

數佛偈の中に法藏菩薩が、假令恒河の砂の數程の聖者を供養するよりも、堅正に
して道を求めて退かぬ方がましだといつてゐらるゝことや、師匠の世自在王佛が弟
子である法藏菩薩に對して、「汝自ら當に知るべし」といはれたことが、又世自在王
佛が法藏菩薩に對して「譬へば大海を一人で舁量するに數千萬年の後にはきつこ底
をきはめて、そこにある寶を手にするこのできるやうに、人が至心精進に道を求
めて止まなかつたら、きつこそれが得らるゝ、そんな願だつて成らぬ事はないぞ」と
いつてゐらるゝ言葉にふれて、私は驚異の感を得たのであります。これ已來、丁度
二十一歳の頃から三十七八歳の頃まで「數異鈔」を味ふたやうに、今度はこの「佛説無
量壽經」に心をひたすやうになつてゐるのであります。

この經典に心をひたせばひたす程、自分が之まで思つてゐる親鸞聖人の精神が、
大分見當ちがひであつたことに氣づくやうになつたのであります。で、私は、今日
の親鸞聖人を敬慕してゐる人々に是非共、この「佛説無量壽經」を色讀體驗するこ

をお勧めしたいのであります。「歎異鈔」なきはまだ味ひ方によりては、詠嘆的な退嬰的な所もありますが、この「佛説無量壽經」を味ふてまゐりますと、いつも精進の心に燃えたつのであります。生々の氣がこの經に充滿してゐるのであります。この經典を繙くまほんたうに、じつしてはるれぬ程力の充足を感じるのであります。他力の信念といふこゝなごも、この經を繙いてみるに民衆的に解釋せられてゐるやうな依頼的な、退嬰的な心ではなくて、踊り出し、はねまはる所の生氣の根源の心である事がわかるのであります。

人間の心の力をこれ程に讚美し、畏敬し、食信してある經典は他にはないのであります。自然力に對する人間の精神力の優越さを宣説したのがこの「佛説無量壽經」であります。此の經典を繙く時には、いつのまにか、この方が大宇宙を支配するやうになるのであります。自己衷心の願力によりて、天下何ものも動かないものはない。そんな難事にもぶちあたりて、これにうちかつのがこの願力であるこゝが、

はつきり記されてあるのであります。

三

「佛説無量壽經」は印度から支那に十二回翻譯せられた然し今日ではその内の五部だけが残つてゐます。「佛説無量壽經」の外に「如來會」「清淨平等覺經」「大阿彌陀經」「莊嚴經」の四つであります。この他にマックスミュレル氏の英譯があります。マックスミュレル氏と同じ底本によりて、南條文雄氏の日本譯にせられたものもあります。夫等を比較して見るに餘程かはつてゐます。大方一つの底本ではなくて、底本が種々にあつたらしいのである。

親鸞聖人が色讀せられたのは、唐の康僧鎧三藏の翻譯した「佛説無量壽經」なのであります。「如來會」「平等覺經」「大阿彌陀經」に常に併せ味ふてゐられました。私が此頃愛誦してゐるのは、この康僧鎧の翻譯した「佛説無量壽經」なのであります。

此經を色讀した人には印度に龍樹があり、天親があり、支那には曇鸞があり、道綽があり、善導があつた。然し誰もこの經典に詳細な註釋を施すやうな事をせられなかつた。本經の註釋書は支那では憬興、淨影、嘉祥、玄一の四人の者があり、朝鮮では元曉があつた。日本に來ては、法然聖人に大經釋がある。即ち「佛說無量壽經」の註釋書であります。

印度、支那、朝鮮、日本に偉大な感化を與へてゐる。「佛說無量壽經」ではあるが、日本の親鸞聖人程深く此の經にくひこんで味ふた人はなかつたやうであります。曇鸞大師が「往生論註」に他力を現はす爲に、「佛說無量壽經」に説かれてある法藏菩薩の本願を引用してゐるが、主として「觀無量壽經」を味ふてゐる。道綽禪師の「安樂集」も「觀無量壽經」の講義であり。善導大師の著述四帖疏が「觀無量壽經」の講義であるのは勿論のこと、他の四部も「觀無量壽經」の心持が多く現はれてゐる。夫等の人々の影響を受けた源信僧都や法然聖人が「觀無量壽經」に傾いてゐられたの

は申すまでもない。

之等の先覺者に啓發せられた親鸞聖人は一向にこの「佛說無量壽經」の研究に沈潜せられたのであります。だから、印度、支那、朝鮮、日本に、我親鸞聖人程能く微細に、自己の生活上に「佛說無量壽經」を體驗した人はなかつたやうであります。聖人は實にこの「佛說無量壽經」から生れ出た第一人者であるといつてよいやうに思ふ。聖人を阿彌陀如來の化身といひ本朝の御坊とたゞへるのも偶然ではないやうに思ひます。

聖人以後に至りては法然の敬慕者の中にも、親鸞の敬慕者の中にもこの「佛說無量壽經」を講じてゐる者は尠くはないけれど、殆んど總てが單なる學問的研究にして、人間の生きた生活の上に體驗しやうといふやうな研究者がなかつたのはいかにも残念です。

明治時代になつて親鸞を敬慕する者としては「佛說無量壽經」の研究が最も大切に

ある事に氣づいた人は確かに大谷光瑞氏であつた。氏は先きに「無量壽經義疏」の著あり。近時大連で講義した筆記だこいうて公けにせられた「極樂莊嚴」こいふ書がある。これも「佛說無量壽經」の研究であります。私は大谷氏がこの經典に着眼されたのを多しするが、やはり學究的な臭味が多くつて、赤裸々の自分の上にこの經典を色讀する態度に出てゐられない事を残念に思つてゐるのであります。そんな他の方の事をいうてゐるのではなかつた。私自身がますます眞面目に、此の經典の體験的な研究に歩を進めたいと思つてゐるのであります。

同時に兄弟姉妹がこの「佛說無量壽經」の研究をしてほしいと念じてゐます。近時親鸞聖人を云々してゐる者は澤山ありますが、多くは「歎異鈔」をざつと讀みて自己勝手に味ふて親鸞を知れりと思つてゐる人が尠くないやうである。之等の人達のいふ所の親鸞聖人はキリスト教の中のパウロと同じやうな信念の人のやうに解してゐるのである。之れ私の甚だ遺憾に思ふ所であります。夫等の人々には、是非共心を

ひそめてこの「佛說無量壽經」を味ふて貰ひたいと切に念する次第であります。

四

「佛說無量壽經」は阿彌陀佛の生涯の記録であります。「華嚴經」「涅槃經」「法華經」等の大乘佛典に阿彌陀佛のここの書かれてゐないのではない位であるが、尤も詳細に阿彌陀佛のこゝを記したのはこの「佛說無量壽經」であります。夫だから「佛說無量壽經」を體験的に味ふ事は阿彌陀佛を體験するこゝになるのであります。

欽明天皇の十三年に百濟王が我朝廷に献上した佛像が阿彌陀佛の尊像であつた。今の善光寺の本尊がそれであります。夫以後阿彌陀佛は我國の民族神のやうに尊信せられてきたのであります。弘法、傳教のやうな方々も阿彌陀佛を尊信してゐられた。就中、この阿彌陀佛たつた一佛を信するこゝに自分の生命を發見した人の最初が法然聖人であつた。この法然聖人の導きによりて阿彌陀佛の本願に觸れた所の親

覺聖人は導いた師よりはもつゝ深くもつゝ親しくもつゝ近く、阿彌陀佛を自己内心の上に味ひ得た人であつたのであります。

親覺聖人の信念の深味を知らうとするには是非共この阿彌陀佛の生涯を深く究めなければならぬ。親覺聖人の信じてゐらるゝ阿彌陀佛はパウロの信じてゐるやうな神ではないのであります。阿彌陀佛は人間魂の具體化したものなのであります。

阿彌陀佛は釋尊の魂の姿であります。釋尊が自己を表現する爲に、阿彌陀佛の因位果上の一生涯の傳記に自己を表現しやうとしたのであります。「佛說無量壽經」は釋尊の創作であります。そして阿彌陀佛は釋尊の創作の主人公なのであります。だから阿彌陀佛の釋尊に於ける、關係はゲーテのファウストに於ける、シエクスピヤのハムレットに於ける、ニイチエのツアラストラに於けると同じ關係なのであります。

こんなことをいふは從來からあり來りの阿彌陀佛のことを思つてゐる人はびつこ

りするかもしれませんが。こゝなんです。彼がびつくりするのは「佛說無量壽經」を研究せぬからなのです。「佛說無量壽經」を研究してゐる人ならば、決してこんな事に驚くことはないであります。「佛說無量壽經」を読んで御覽なさい能くわかります。

釋尊が王舍城耆闍崛山においての節、大比丘衆一萬二千もゐる夫等の人々が、この日釋尊自身と同じ姿に見えたので釋尊は非常な喜悅に入られた。經には、今日世尊諸根悅豫、光顏巍巍にましますと書いてあります。いかにも嬉しさうなこのお姿にみされてゐた御弟子の阿難が、あなたはさうしてこんな尊い姿になられましたか、きつゝ今日あなたの心に尊い法が宿つてゐらるゝにちがひない。あなたは尊い方を念じてゐらるゝにちがひない。さうかお心をうちあけてきかして下さいと懇願しました。その懇願に答へる爲に、即ちこの法悅の心を具體的に表現する爲に、一つの話を書かれた。その話の主人公が阿彌陀佛であります。

このお話の始めに「乃往過去 久遠無量 不可思議無央數劫に佛まします」とい

てゐられます。これは、むかし／＼のそのむかしいふやうな事でありまゝ。いはゞ釋尊が自己の萬人にうちまけた心の悦びを表現しやうとして語り出さるゝ一つのお伽話がこの「佛説無量壽經」なのであります。阿彌陀佛は創作の主人公であります。だから阿彌陀佛がこの世に生れた姿が釋尊であります。同時に、この阿彌陀佛を體驗した所の親鸞なのであります。創作の主人公に合掌して、さうぞ助けて下さいと乞食のやうに、歎願してゐるやうな輩は、まだ親鸞の心に到らぬ人であります。親鸞が彌陀に頼むといひ、本願を信するといふのは、そんな對立的な物質的な淺薄な依頼的な心では斷じてないのであります。

親鸞聖人が阿彌陀佛を信するといはるゝのはもつ／＼深い意味があるのであります。阿彌陀佛は神ではないのであります。釋尊の阿彌陀佛が釋尊自身であるやうに、親鸞の阿彌陀佛も親鸞自身であるのであります。今日私達が彌陀を信するといふ時には、阿彌陀佛は私自身であらねばならないのであります。こんな境地を古人

は佛心凡心一體といつてゐます。

この體といふことも、之を機械的に對立的に物質的に解釋する、いはゆる唯心の彌陀は心の淨土に親鸞聖人が嫌うてゐるゝやうな見解に沈まねばならぬのであります。こゝはなかく筆に盡し難い所であります。こんな所は冷煖自知であります。世自在王佛の申さるゝやうに、汝自當知であります。

國王であつた人が世自在王佛の話をきいて自分の生活の不徹底な事を感じて、道を求むる爲に、國をすてゝ、王の位をすてゝ、修行者になつた。この人を法藏といふた。この法藏が自己中心の生死解脱の願望を貫いて成長してゆく姿を詳しくうかいてあるのが、「無量壽經」なのであります。この「佛説無量壽經」を繙いてこの法藏菩薩の願ひを聞き、修行の覺悟をきゝ、得た所の心の境地をきくこゝがこゝまゝ、自在を求め、清淨を求め、生命を求むる者の、尊い道であるのであります。親鸞聖人は法藏菩薩の生涯を深く研究して自分の生活を明かにして、自分の道に精進した方

であつたのであります。聖人は自分の上に法藏の姿を味ひつゝ、阿彌陀の淨土を欣求せられた方でありませう。いふ所の彌陀の淨土といふは、聖人が「教行證文類」の眞佛土卷に記されたやうに、無量光明土のこゝであります。絶對の境地なのであります。生命のみなざる世界なのであります。光明のかゞやく世界なのであります。

私は心を潜めて、「佛說無量壽經」を體驗的に研究しつゝ、聖人の魂の跡を追はんとする者であります。(一〇、一一、三)

八。破壊に生ける親鸞聖人

一

「現代」編輯員各位

親鸞聖人の一生の中尤も高潮に達した場合はごごだつたらう。そうして尤も私の感激した場合はごごだらう。私はお尋ねによりて今更めて考へてみました。

偉大なる人格者は一生の間常に緊張した生活をして、たるみがないやうに思はれます。従つて偉大なる人格者は常に高潮に達した生活をしてゐると思ひます。我師親鸞の一生はいつもたるみのない生涯であつたやうです。それでいつもはらく／＼させる程にきほい境を越えては進んでゆかれたやうであります。ですからこの場面

が殊更に高潮に達してゐる、こゝ抜き出すのは、聖人を讀す事になるかもしれない。私の感激を受けた場面さうでもです。久しい間聖人の教に育てられ、三十年近くも殆んど日夜に聖人の跡を追うてゐる私にこりては、殆んどすべての場面が感激を引くさうでもよいのであります。するに聖人の一生の事跡やら思想やらを詳しく語らねばなりません。そうする事はあなたのお尋ねに對する答としてあまり可憐すぎるやうにも思ひます。でざつと一通り語らして頂きます。

二

生命ある者は成長します。成長する事は變化する事であり、變化の一面は破壊であつて、一面は建設であります。成長する事は常に建設する事であり、常に破壊する事でもあります。それで成長の速かなものには、この建設と破壊の姿がはつきりするのであります。生命力の強い人格者は、成長が速かなだけに、破壊と建設の

姿が明瞭になつてゐるやうであります。

古い殻をぬいで新しい世界に入り、その新しい殻をぬぎ、又新しい世界に入るさうに、生命の流轉は日夜に殻をやぶりては踴躍するのであります。

聖人の一生は止むことのない急速の進轉を續けてゐられましたから、いつも殻をぬぎ、殻をぬぎ、未知の世界に精進してゆかれたやうであります。

私が聖人の生涯に感激する所は、聖人がいつでも、自ら心内の生命の踊るがま、に柔順に、(夫に對する外物に對しては強直に)延びてゆかれた事であり、聖人の常に沈滞する所なく、住まる所なく、破壊から破壊へ精進してゆかれた事が、私の心をいたく引きつけるのであります。換言すれば、聖人の生命力の強大なる事、それに正直に信順して、外から来る所のいろ／＼の事物にまけないで、勇ましく精進せられた姿がなつかしいのであります。

三

聖人の生涯は生命のあるがまゝの姿であつた。故に殻にこままつてゐるもの、やうな平面的羅列的の生涯ではなくて、立體的な奥行きのあるものであつた。聖人の著述を見ても、一書は一書づゝ進轉の跡を見ないのことはない。澤山の著述の間には止むここのない聖人の生命の火焰が燃えてゐます。この一つ一つにさきものを葬むりて新らしく生るゝ趣きのないのではありません。

聖人の生涯の中に、特に目だつた進展は外面的には五つあつた。

第一は、九歳の時の得度であつた。

第二には、二十九歳の時の法然聖人への入門であつた。

第三は、三十五歳の時の、吉水僧團の破壊によりて、越後の國への流罪であつた。

第四には、六十歳の時、關東を出で、京都に歸らるゝ時であつた。

第五は、九十歳の折に肉體の破壊せられた時であつた。

この第五の破壊はこゝにかくして、前の四つの破壊の跡を見るに、いつでも正直な、純真な、自分を欺くこゝのできぬ尊い魂の光りを拜ませにはゐられないのであります。

四

聖人は高倉天皇の承安三年四月一日に京の郊外日野の里にて誕生せられた。父を藤原有範といひ、母を吉光女と申した。父は聖人の四歳の折に、母は八歳の折に死なれた。その後聖人は一人の弟と共に伯父の範綱の所に養育されておるでなつたが、出家入道の志のこゝうしてもひるがへす事のできぬ所から九歳の時に、大僧正慈圓の門弟として佛門に入られました。こゝに聖人の第一歩が踏み出されました。伯父につれられて慈圓のこゝに行かれて、伯父から入門の事を慈圓に話され、承諾を

受けて、もう日暮になつたので、けふは之で歸り、改めて入門の式を挙げやうとせられたが、九歳の童子なかくき、入れない。今すぐ得度してほしい、今夜入門したいと、だ、をこねてやまない。つい當時はやつてゐた歌に、

あすありと思ふ心のあだ櫻夜半に嵐のふかぬものは

と詠じて、明日と延ばされぬ生命の望みを述べられたので、夜中、灯火をこもしてその式を挙げられたのであります。この時の松若公の氣象(聖人の幼名を松若公と申しました。)が一生に活躍してゐるやうであります。己に自分が佛門に入る事を決した以上、師匠が何といはれやうが、伯父がさういふめられやうが、日暮であらうが、人がさう迷惑しやうが、そんな事にかまうてゐられず、たゞ一心に自分の内心の欲求の遂行に精進せらるゝ、生命そのまゝの踴躍の姿が、聖人の一生を通じて働いてゐるのであります。聖人の生涯に接して私の感激する所は、この純真な、一徹な、正直な心の姿であります。子供の心、幼童の心、思ひたつたら、頑として動か

ぬ心、この心が第二の破壊を、第三の破壊を、第四の破壊を、勇ましく通りぬけて行かるゝ魂であります。妥協のない、退却のない、進轉し進轉し行く生命そのまゝの姿が聖人の一生を飾つてゐるのであります。

五

九歳の折に佛門に入った聖人は、眞摯に佛教を研究せられた。單なる學問としてではなく、一つ一つ自己の體驗の世界に之を味はうとせられました。經典にかいてある事でも、鵝のみに之に順ふ事ができなかつた。順へないのに順うたふりをする事は一層できなかつた。聖人は青春の血の燃ゆる年頃から非常に苦痛を嘗められました。十九歳の折にはこの痛みを以て、河内國磯長の聖徳太子の廟に詣で、救ひの道を祈られた事もあつた。これから十年間は聖人一生の中の尤も苦しい時であつた。この間の苦悶は、性慾と性慾を否定する戒律との間の衝突の苦悶であつた。經

典には性慾を罪惡と記してあり、僧戒としては之を嚴禁してある。處が、自分の内よりは猛烈な勢を以て性の慾念が起つてくるものを、よい加減にしまひつける事のできなかつた正直な聖人は、外部にしかつめらしき顔をして、内心に慾性を藏して知らんふりをしてゐるに堪へなかつた。こゝに聖人の苦みがあつた。固定した律法と躍動流轉してやまない内からの衝動と、いづれに順ふべきか。前者に順ふのが善であり、後者に順ふのが惡とせられてゐる。處が、聖人は前者に順はうとしても本心から順ふ事ができず、いつのまにやら後者に引きずられてをるのである。こゝに於て、自分はゐるに足らない罪惡深重な男だと思はずにはゐられなくなつた。律法へか、女へか。行かねばならぬと思ふ心と、いつてしまふ心との衝突になやんで、泣きながら、さうかして行くべき道に行かうとせられた。そうして、ある時には絶食して無劫寺に籠つた事もあつた。つひに、二十八歳の暮頃から京の六角堂の觀世音に祈願をこめられた。女に行く心、之を否とする律法の心、この矛盾にたちて、

さうか前者を捨て、後者に行かる、やうに祈願をこめられた。その祈禱の間に、觀世音の告に、

行者宿報ありて設し女を犯さば

我女となりて汝に犯されん。

一生の間能く莊嚴也

臨終には相もなうて極樂に生れん。

さういふ言葉をきかれました。之れやがて女に行けとの告ではなかつたか。聖なる力として祈願してゐた觀世音自らが、女となりて汝に抱かれやうといはるゝ、感得した所で、聖人は佛と女との一體を感じられたのであつた。女を抱く事は佛に抱かるゝ事である事を感じしたのであつた。

かく内面に道の開けた聖人は、ゆくりなく、三條の大橋で聖覺法印に逢ひて法然聖人の所に訪ねて、聖人から、惡人成佛の本願の道を聞き、こゝに自己の内なき、

し聲を、師の外からの教へへの合致を感じ、つひに、律法的な叡山を降り、自分の好きな女と結婚しつゝ、法然聖人の膝下に教訓を受けるやうになりました。聖人の肉食妻帯は聖人の中心の欲求の實行であつた。肉食妻帯の上に本願力を味はれたのであつた。(拙著「親鸞聖人論」参照)律法の殻をやぶりて自分の本然の道に進まれた所にも九歳の折、あのまゝでもやまない純真な心が光つてゐるのであります。

六

三十五歳の時には、時の政府が法然聖人の下に集る人達を危険思想だとして解散を命じ、法然聖人は土佐に流罪になり、親鸞は越後に流罪になりました。この時は聖人も憤慨せられたものを見えて、「主上臣下、法に背き、義に違へ、怒を爲し、憤りをむすぶ。」と絶叫してゐられます。この破壊は外部よりの破壊であつたが、之によりて聖人が師と別れて獨りたつ道に精進せられたのであつた。之から十五年を

経て、師の「選擇集」に飽きたらぬ心から、「教行信證文類」といふ一書を著すやうになられました。ここに師の思想からの解脱が現はれてゐます。

七

四十歳から六十歳まで常州稻田に庵を結び、第一の妻を迎へ(第二の妻は聖人の三十三の時に死なれたと傳へられてゐる)六人の子を得、門弟も澤山にできて新らしい僧團ができてゐた。常に殺にゐる事のできぬ聖人はつひに、この家族と僧團との殻を破壊して、丁度トルストイが老いてヤスナヤボリヤナの家をぬけてたやうに、常陸の家を逃れて故郷である京に歸られた。京に歸つてからは、長安洛陽のすみかも跡を止むるにもうしみて、處々に移住してゐられました。さうしてその間には交る人も多くもつてゐられなかつた。六十歳にして、妻子と門弟をすて、靜處につかる、聖人の姿の上にも、私は若々しい魂の光りをみるのであります。この若々し

い魂があつたればこそ、その後「愚禿鈔」「入出二門偈」「淨土文類聚鈔」「唯信鈔文意」「三經往生文類」「一念多念證文」「淨土和讃」「高僧和讃」「正像末和讃」等の製作ができたのであります。そうして、八十八歳になつて潑刺した力にみちた「自然法爾章」の一編をものする事もできたのであります。あの「自然法爾章」を読むと、純真な、率直な、いつも殻に止まる事のできぬ聖人の魂が強い光でかゞやいてゐるのであります。

かくて九十歳にして、龜山天皇の弘長二年十一月二十八日にこの世から姿をかくされました。(一一、二、一六)

あとの言葉

□昨夜の盆の月を京の東山で見ました。一つの月だけども、京で見れば京の趣きがあつて美しかった。大阪から来た友人と京の友人と五人でそゞろあるきしつゝ、月を浴びて、月にふさはぬやうな議論もしたり、いやみもいふたり、歌をうたふたりして、しつこり着物に露のうつる頃に、東福寺の寓に歸りました。

□「華嚴三昧の中からの印刷が後れてゐた爲に、何さなく氣後れがして、「にほひ草」の第八も第九も出せなかつた。第八「沈黙の自殺者」の原稿がまだできないから、第九巻として、この集を發行する事にしました。第八巻は後れて出る事になります。

□この集に納めた文章の多分は「中外日報」に掲載したものです。「佛說無量壽經の體驗者親鸞聖人」「眞宗の世界」「破壊に生ける親鸞聖人」は「現代」に出たのです。

□遙か下の方に電車や汽車の進行する音が聞えるけれど寺の庭には晝のうちから蟲がいない

ある。朝から頬白が頻りにないてゐた。

□「薬王樹」を出してゐるから、このあさの言葉に録する事が妙くなりました。私は本集を京の印刷屋に渡す爲に、三日に京に來たのです、本日之を渡して明日歸國します。

あさの言葉

目次

第一章 常倫を超出する者……………(一)

第二章 主義の諸問題……………(四)

- 一。新運動新思想に對する嚴重な取締……………(四)
- 二。主義者達へ……………(五)
- 三。最後の繫縛……………(六)
- 四。道德の世界と宗教の世界……………(七)
- 五。理想主義に就て……………(八)
- 六。真理の否定的表現……………(一〇)

第三章 愛の諸問題……………(一九)

- 一。男の生首に接吻する女……………(二二)
- 二。徹底なき愛の傷み……………(二六)
- 三。愛は所有する……………(二六)
- 四。愛は苦也力也……………(二四)
- 五。自己の愛に精進する者……………(二五)

第四章 雑……………(二六)

- 一。子供の訓育に就て……………(二七)
- 二。垣を造る心……………(二七)
- 三。大谷派の現状に就て……………(二五)

- 四。三人の俊寛の最後……………(一九)
- 五。北安田より……………(二三)
- 六。恐るべき人物評……………(二七)
- 七。佛説無量壽經の體驗者親鸞聖人……………(二四)
- 八。破壊に生ける親鸞聖人……………(二五)

以上

規 約

にほびぐさは私の著作集のやうなものです。
毎月一回宛發行したいと思ふてゐます。澤山
かけた時には頁数の多いのを出し、かけない
時には小さいのを出します、少しもかけない
時には出さないのです。ですから毎號定價が
かはります。で、大ざつばに一年分拾圓、半
年分五圓としておきます。前金で申込まるゝ
方はその積りで申込んで下さい。そうします
とその號その號の分を引き去り入金のあるだ
けの分の本を送ることにします。出さなくな
つた折には前金を返す事は勿論の事です。

大正十一年十一月二十日印 刷
大正十一年十一月廿五日發行
大正十三年十月十五日四版發行

【定價金壹圓五拾錢】

著 者 曉 烏 敏
發行人

印 刷 者 堀 井 清

發 行 所 石川縣石川郡出城村北安田
香 草 舍

振替金澤三六九八番

賣 捌 所 東京 東 京 堂
京都 丁子屋書店

曉烏敏著作の一部目録

にほひくさ

第一卷	生くる日	第五版	金一圓二十錢
第二卷	親鸞聖人論	第八版	金一圓二十錢
第三卷	死の國々々	第四版	金一圓二十錢
第四卷	父の印象	第二版	金一圓二十錢
第五卷	温かき大地	第二版	金一圓四十錢
第六卷	諸行無常	第二版	金一圓二十錢
第七卷	華嚴三昧の中より	第二版	金一圓五十錢
第八卷	常倫を超出する者	第四版	金一圓五十錢
第九卷	不可説轉の記	第二版	金一圓
第十卷	沈黙の自殺者	第二版	金一圓
第十一卷	内省せられたる自己	近刊	金二圓

三 部 作

第一卷	更生の前後	第八版	金三圓
第二卷	獨立者の宣言	第五版	金二圓五十錢
第三卷	前進する者	第四版	金二圓八十錢

最新刊講演集

佛說無量壽經嘆佛偈講話	新刊	金一圓二十錢
佛說無量壽經三誓偈講話	新刊	金一圓
佛說無量壽經五惡段講話	新刊	金一圓五十錢
佛說無量壽經東方偈講話	近刊	金一圓三十錢

パンフレット

運命論者の群

定價金二十五錢

華嚴經の歸趣

定價金十五錢

蓮如上人論

定價金十五錢

道の講話

定價金十五錢

ソクラテス

定價金二十錢

(引割二上以部百)

月刊雜誌

藥王樹

毎月一回發行

定價金一圓

これは曉烏敏が主幹する雜誌です。主として自分の思想を發表し、知友の思想をも發表するのです。

發行所

石川縣石川郡
出城村北安田

香

草

舎

338
1
378

終

